

北門（国登録有形文化財）

【構造・形式】木造、切妻造、平入、茅葺
【建築年代】昭和8年以前

■建築年代の推定
「宇喜世」創建時からあったと言われている北門であるが、その資料はあまり残っていない。しかし「越佐大観」にはうきりと北門の写真が掲載されている。このことから、少なくとも昭和8年以前には存在していた事は確かである。



昭和初期の宇喜世の北門。

■建物概要
梁・柱の痕跡を見ると道路から見て右側（西側）が1m程度拡張されていることがわかる。「越佐大観」の掲載写真にはその箇所が塀になっている。昔を知る人に確認を取ってみると「大勢の客が押し寄せた際、塀を壊してしまい、その時に広げた」とのこと。大門通り入り口近くに位置するこの北門は、「宇喜世」の入り口ということだけにとどまらず、この地区を代表する歴史景観資源として位置づけられている。

東門（国登録有形文化財）

【構造・形式】木造、切妻造、平入、銅板葺
【建築年代】昭和26年以前

■建築年代の推定
東門の建築年代ははっきりしない。しかし昭和26年に行われた旧高田市の資産税現地調査時の写真に、屋根が板葺きではあるが（現況屋根は銅板葺き）、東門が写されている。このことから東門は昭和26年以前に建てられたものである。



昭和初期の東門。仲町通りのシンボルのひとつ。

■建物概要
上越市高田の中心的飲食街の中にあり、古くからその中心的存在である「宇喜世」の仲町側の入り口である東門は、北門とは異なり、料亭の華やかさを表したものである。柱・梁は自然の丸太が使われ、中央部には大きな板戸があり、現在も開店、閉店時に開け閉めされている。梁中央部には「宇喜世」を象徴する「だるま」の看板が掲げられている。

「転んでもすぐ起きるだるまさんの絵が描いてありますが、「世の中は七転び

八起き」。今日嫌なことがあっても、美味しいお酒とお料理でリフレッシュして、明日またがんばりましょう！」といったメッセージが込められていると昔から言い伝えられている。



名物のだるまの看板。



蒔絵大盆

国登録有形文化財

宇喜世今昔物語

百年料亭
宇喜世

百年料亭
宇喜世

国登録有形文化財

〒943-0831 新潟県上越市仲町3丁目5番4号
Tel.025-524-2217 Fax.025-523-9030
<http://www.ukiyo.jp/>

本館

（国登録有形文化財）

【構造・形式】木造3階建、入母屋造、平入、棧瓦葺（一部金属板瓦棒葺）

【建築年代】昭和13年以前

江戸時代の仲町は「田端」という町名で呼ばれ、主に魚の市場や卸業を営むお店の多い町であった。

江戸時代末期（1800年代中頃）、当時の主人・寺島甚之助は仕出し屋を営んでいた。その後、幕末から明治の初め頃に、甚之助の娘婿、八蔵が割烹料亭を始め、現在に至る。当時の屋号は名字のまま「寺島屋」としていた。

昭和8年頃に「う喜世」（越佐大観に書かれているという屋号にし、現在の「う喜世」として続いている高田きつての老舗料亭である。



昭和27～8年頃の仲町、宇喜世の前。祇園祭りのときの写真。

本建物の敷地は、JR高田駅前を南北に走る仲町通りと、これと直角に交わる重要有形文化財「浄興寺」の大門通りとの角地である。

主屋の西側には庭園があり、池泉・樹木などを配して各座敷からその景観を楽しむことができる。



北門から、本館入口をのぞむ。

■ 建築年代の推定

主屋の建築年代は、昭和13年の改修で現在の姿になったものと推定する。割烹料亭という用途上、創建以来何度となく改修がなされている為、その時々の写真等の資料により考察する事とした。

上越市の資産台帳の名寄帳には、昭和44年の鉄骨での改修時の記録が書かれており、昭和26年（1951年）時の標準家屋評価調書と付属図面と写真が残されている。この調書には建築年月日は70年前と記されている。調書の日付から70年を遡ると明治14年（1881年）となり、明治中期頃には創建されていたものと考えられる。



ライトアップした日本庭園。

■ 客室

【竹の間】



昭和8年当時の竹の間。

竹の間は20帖敷きの座敷で、東側には畳敷きの前室がある。西側には畳縁を設けており、これは現在竹の間と一体的に使用され、室内から庭の景観を楽しむことが出来る。

部屋の北側には床の間を設け、床脇壁には下地窓とした花明窓を設ける。棚などは設けていない。落掛には竹を用い、床柱には樹木の下部が複雑に絡む様子を巧みに活かした漆塗りの自然木を用い、料亭の客室として趣向を凝らした意匠としている。

昭和8年、21年には、高松宮宣仁殿下が来店されている。

竹の間の東側には、新館へと至る地下通路が設けられているが、現在では使用されていない。



竹の間の障子飾り。いたるところに趣向を凝らしている。

【松の間】

松の間は45帖敷きの座敷で、竹の間の様に西側に畳縁を設けている。南側には床の間を設け、左床脇には二階棚、背面は円窓として意匠を凝らす。また、床柱には素朴であるが豪快な自然木を用いており、ひとときわ目を引く存在感を示している。

【月の間】

月の間は10帖の座敷で、二階の客室の中では最も小さい部屋である。床の間の傍らには月の間という室名が示すように、二日月を象った飾り窓を設ける。床柱には素朴な自然木、北側の棚脇にも同様の材を使い、縁側の間仕切りには腰壁や建具などに数寄屋風の意匠を取り入れている。



月の間。少人数で楽しみたい。

【春の間】

春の間は20帖敷きの座敷で、室の周囲には縁を廻らす。床柱は径の大きい豪快な自然木とし、床の間廻りにも自然木の柱を用いている。部屋の南側にも床の間を構え、床脇には円窓を設けている。



春の間から、日本庭園の眺め。

【水車の間】

水車の間は10帖敷きの座敷で床柱、天井飾りなど随所に水車の部材が使われている趣のある部屋である。非常に人氣のある部屋で多くの利用があったと言われている。部屋ばかりでなく、階段にも水車の部材が使われている。



水車の間の天井飾り。

【大広間】

大広間は二階の大部分を占める非常に大きな室である。153帖の大空間で、東側には奥行一間の大床、西側には舞台（ステージ）を有する。室の周囲には廊下を廻らしている。

天井板には花草を描いた天井絵を施す。床の間は二間幅、両床脇は一間半幅で、床柱は向かって左側が漆塗りの豪快な自然木、右側は径の大きい磨き丸太である。

約36m×8mの室は非常に広く、また、天井などには上質な手法を用いており、床の間廻りや欄間など意匠性に富んだ造りとなっている。



大広間。反対側に檜のステージがある。

【桜三階】

桜三階は8帖敷きで、北側には縁がある。出書院を備えた座敷で、その名が示すとおり床柱や落掛をはじめ、至る所に桜材が用いられている。

対面の西側には火灯窓風の飾窓を設け、また、縁や階段の腰壁は網代張りとするなど、随所に手の込んだ仕上げ・手法が用いられており、料亭の客室として上質の座敷であるといえる。

【仲三階】

床の間は他の室と異なり奥行が浅く、床脇も小さい造りである。床柱、落掛には自然木を用いており、全体として素朴な雰囲気を感じさせる。

【新三階】

16帖敷きの座敷であるが、西側の一角は変則的な形状である。室の東側に床の間を構え、また、南側にも棚と床の間を設けている。他の室に比して造りが新しく、また、床柱以外には意匠的な装飾は見られない。

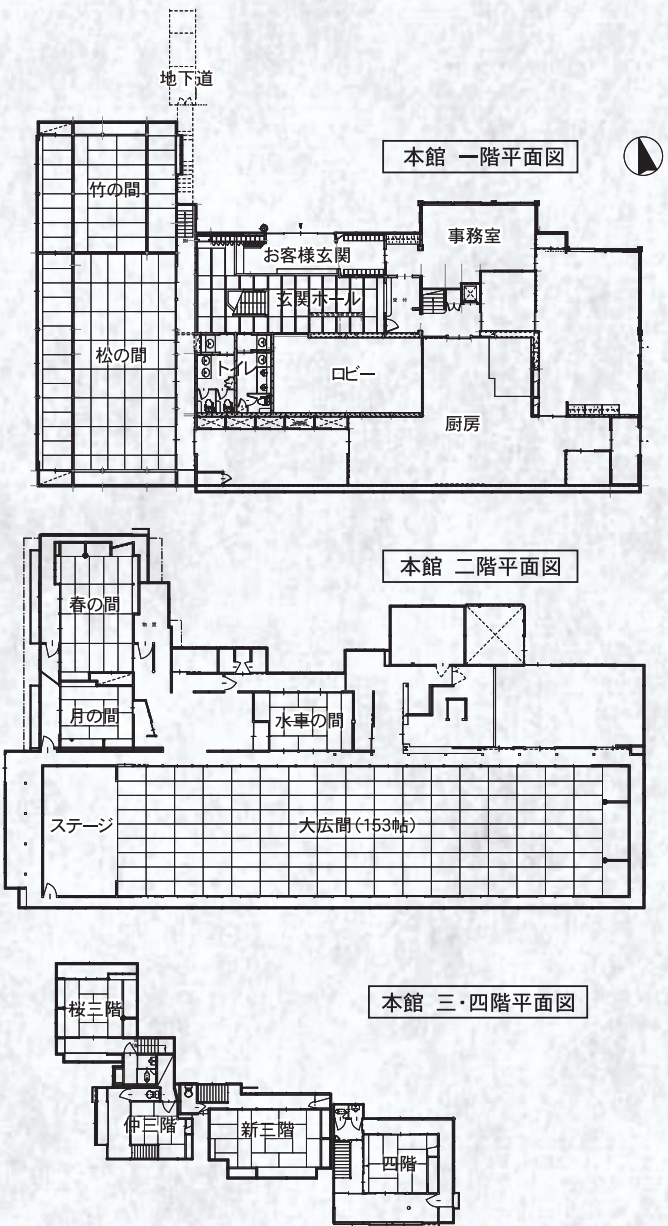
【四階】

四階は8帖の座敷で、周囲には縁廊下を廻らす。「四階」は一部が天井の高い大広間上部にあるために、他の三階の室より高い位置にある。そのため「四階」と呼ばれているが、実質的には三階である。

他の三階の部屋に比して高い位置にあることから、座敷を囲む縁廊下からは建物周囲の景観を見渡すことができ、望楼風の要素を持ち合わせていると言える。



高卓丸天板螺鈿細工



京都名所 名々蒔絵縁金 会席膳